

平成30年度 第1回宇治市小中一貫教育推進協議会会議録

会議名	平成30年度 第1回宇治市小中一貫教育推進協議会
日時	平成30年7月23日（月） 18時00分～20時00分
場所	宇治市役所 6階 602会議室
出席者	（委員） 薮会長 伊藤副会長 中村委員 内田委員 原田委員 瀬野委員 葛山委員 （事務局） 岸本教育長 伊賀教育部長 藤原参事 市橋教育支援センター長 栗田教育総務課長 金久一貫教育課長 吉田学校教育課長 福山教育支援課長 渡邊一貫教育課副課長 上口一貫教育課総括指導主事 新田一貫教育課教育指導係長 川嶋一貫教育課学校教育指導主事 村田一貫教育課学校教育指導主事 * 中本委員 井戸本委員は欠席
配付資料	平成30年度第1回宇治市小中一貫教育推進協議会資料 平成30年度中学校ブロックジョイントプランー小中一貫教育推進計画ー

1 開会

- ・岸本教育長 開会挨拶
- ・各委員自己紹介
- ・事務局自己紹介
- ・設置要項に基づき会長に薮委員、副会長に伊藤委員を選出
- ・薮会長挨拶
- ・伊藤副会長挨拶

2 報告及び協議事項

（1）報告1 平成29年度宇治市小中一貫教育推進協議会の活動概要

資料6頁に沿って事務局より説明

報告1についての質問・意見等と応答

（委員）

昨年度の委員として、小中一貫教育教育の推進のために、小中学校の先生たちが合同で研修会や合同での事業のための打ち合わせを熱心に行い、推進に努めておられる様子を参観させていただき、先生たちの熱心な姿に感心したのを覚えている。後日、その小中合同の事業を参観して、打ち合わせの意図なども十分理解でき勉強になった。また、中学校の先生が、小学校6年生の児童に、「中学校の学習は、こんなことをこんな風にするのだ。」という話も聞かせてもらい、地域の状況に応じた取組が行われていることを理解した。

（会長）

今の委員の話は、私も参加した8月18日に大久保小学校で行われた「広野中ブロック合同研修会」視察の件であると思うが、小中学校の先生方が「真剣に議論されているなあ」という印象を受け、真剣に熱心に取り組まれていると感じたことを覚えている。

（委員）

受け入れ側の学校担当者として、委員の皆様にご我々の取組を知ってもらえたことに価値があり、また、学校関係者以外の方々に「見守ってもらっている」という印象を受けた。合同研修会では、それぞれの教師が、本音で積極的に話し合うことを目標に掲げ取り組んだが、その目標については、一定達成できた。ただし、（後日に委員の方々からご指摘いただいたように）話し合ったことをど

れだけ具体的な取組に生かすかという点については、課題が残ったと感じている。

(会長)

我々の視察が、良い意味で刺激になれば、視察の成果はあったと感じている。8月18日の研修会を複数の委員で視察したことは、同じものを色々な視点で見たという意味で成果があったと感じている。2回目以降の視察は、各地域毎に分散して視察したが、各委員が所属する地域の小中学校の小中一貫教育推進の状況をそれぞれ理解したことは、それはそれで有効であったと感じている。

(委員)

我が子から聞いた話では、自分が小学生の時に、中学校の先生が話をしに来てくれて、その先生が、自分が中学校に入学したらおられるという点で、安心感があると言っていた。小中一貫教育が、どんなものなのかは、(委員でなければ)一保護者としては、この程度のことしか分からないのが現実だと感じる。

(2) 報告2 平成29年度小中一貫教育の取組到達状況報告

資料7頁に沿って事務局より説明

報告2についての質問・意見等と応答

(委員)

当初は、教師連携から始めていくことが示されていたが、教師連携については、現在、ほとんどの学校において出来上がっている。前任校においても、相当な数を小中連携・小小連携を進めてきていた。今後は、各ブロックが「学力向上」に視点を置いて進めていかなければならないと考える。学力向上という視点での小中一貫教育の施策が十分見えてこない現状があるので、学力向上のためにも、ラーニングコーディネーターの十分な活用が期待されていると感じている。

(委員)

平成24年度に小中一貫教育が全面実施され6年が経つが、指導体制については、改善が図られ、次のステップを目指すために、昨年度よりラーニングコーディネーターが配置されることで、踏み出すことができたのではないかと考える。そこで、今年度、どのように展開していくのか、(校長として)楽しみにしており、保護者はもっと楽しみにしておられると思うので、期待している。

(会長)

2人の委員さんから共通して出てきた「ラーニングコーディネーター」については、昨年度から配置されているが、市教委事務局は、ラーニングコーディネーターの活躍の度合いをどのように把握されているか、お聞きしたい。

(事務局)

昨年度については、施設一体型の宇治黄檗学園に1名を配置した。(小中一貫教育を推進する)組織については、概ねどのブロックも出来上がっていると理解している。それを土台に学力向上に向けて何らかの手立てが打てないかを検討してきた。昨年度は、1ブロック(宇治黄檗学園)だけであったが、子どもの学習状況だけでなく、子どもの意欲的な部分に視点を当てて取り組んできた。具体的には、宇治黄檗学園では、外国語活動・英語教育の文部科学省の研究指定を受けながら行ってきた。その中で、教師自身が指導力を向上し、それに伴って子どもたち自身の英語やコミュニケーション能力に対する学習意欲が高まったり、能力を伸ばしていったという報告を受けている。

(会長)

(4)の家庭・地域社会との連携については、間違いなく学校発信の情報は、密度の濃いものになっていることは間違いがない。私自身も、我が子が小中学校に在籍している頃は、保護者として、(小中一貫教育の)情報が入ってきたが、子どもが中学校を卒業後は、一地域住民となったので、以前に比べると情報が、入って来なくなった。私のように、地域の役員をしていると、一地域住民と比べると情報は一定入るが、地域住民にとっては、「保護者」という円の外側にある「地域住民」という円にまで情報を届ける方策を講じる必要性を感じる。

(委員)

(4)の家庭・地域社会との連携については、学校サイドでも大きな課題であると考えている。縦の接続と横の連携ということで、小中一貫教育を進めてきているが、地域の方に情報発信をすることについては、ホームページや新聞、リーフレットを使って発信しても、なかなかそれが、伝えるべき対象者、伝えたい対象者に、伝えることが難しいという現実がある。例えば、中学校校区ごとの地域懇談会等で、直接発信する機会を設定しても、本当に聞いてもらいたい地域の方々に聞いてもらえないというもどかしさを感じている。そこで、今後も、どんな方策が考えられるかを市教委とも一緒に研究していかなければならないと考えている。

(委員)

木幡中学校ブロックでは、従来より「おもろいやんか木幡」というお祭り行事を行ってきているので、そのセレモニーの中で、小中一貫教育の取組の紹介をする時間をとっているのですが、各ブロックでも、このような工夫をすれば、地域の方々にも小中一貫教育について伝えることができるのではないかと。

(3) 報告3 平成30年度小中一貫教育推進協議会の活動について(案)

資料8頁に沿って事務局より説明

報告3について質問・意見等と応答

(会長)

今年度の活動について提案があったが、委員が複数回視察を行っても可能か？

(事務局) → 可能である。

(会長)

さらに、視察の場合には、市教委からも同行してもらえるのか？

(事務局) → 必ず同行する。

(会長)

委員として、複数回の視察が可能であり、視察できる内容の取組がある場合には、市教委事務局より、案内が入ることが確認できたので、(残された時間の中で)本日出席されている各学校からの委員の先生方から、各ブロックの状況をジョイントプランをもとにPRしていただきたい。

(委員)

広野中ブロックでは、委員の皆様等に公開したいと、市教委(一貫教育課)に提示しているのが、10月23日に計画している「第2回ホットミーティング」である。ただし、この行事は、従来より、広野中・大久保小・大開小の1中2小の生徒会・児童会の各役員が、「エコキャップ運動」についての取組報告を行う場であったが、近年は、取組として成り立たない状況となってきたため、今年度の「第2回ホットミーティング」は、エコキャップに代わる新たな取組について意見を出し合う場にしたいと考えている。そこで、当日の展開の読めない場の視察で良ければ、喜んで公開したい。

(会長)

現状を包み隠さず報告いただきありがたい。ところで、ジョイントプランに示されている、「小学校クラブへのアシスタントティーチャーとしての参加」とは？

(委員)

広野中学校の部活動(運動部)の部員が、大久保小と大開小に分かれて、クラブ活動の指導に向かう行事(取組)である。したがって、委員の皆様には、この行事を視察していただいても興味深いと思われるので、お薦めしたい。

(委員)

11月26日のブロック部会がお薦めである。ただし、会場が3校(横島中、横島小、北横島小)に分かれるので、視察する側が大変ではないかと思う。

なお、どのブロックも「学力充実」にかなりシフトを置いて取組を進めている。横島中ブロックでも、今年度新たに「学力充実部会」を設立し、11月のブロック部会当日も、3会場に分かれて、主な教科や総合的な学習の部会に分かれて、学力充実を重要な視点として協議を行うので、会場が

3つには分かれるが、ぜひ視察に来ていただきたい。ただし、学力の充実・向上を重点とした取組は、どのブロックでも最重要課題として進めているので、各地域の特性に応じた取組について視察を行うことは、大きな価値がある。

(委員)

昨年度の本校への視察の記録を見ると、委員の皆様にはおそらく学園会選挙の状況を視察いただいたと思われる。宇治黄檗学園（黄檗中ブロック）の取組を視察してもらう機会の一つとして、「子どもフェスティバル」があるが、これは、毎年休日に行われ、地域を巻き込んだ祭りでおもしろい行事である。また、8月に行われる合同研修会（宇治黄檗学園としての小中合同研修会）は、今年度は、ラーニングコーディネーターを前面に出して、本校の最重要課題を「学力の充実」と捉えて、「主体的・対話的で深い学び」を目指して、今求められる学力の向上を図るべく研修会を行う予定である。具体的には、年間を通じて大学の先生にブレーンとなってもらって指導を受け、この夏の研修会では、「主体的とは？」「対話的とは？」「深い学びとは？」を具体化するべく研修会を行うので、視察してもらえれば、いわゆる「アクティブラーニング」の具体的な姿を十分理解してもらえると思う。公開するもう一つの行事である「学園会選挙」は、他校では見られない小中が一緒になった役員選挙の様子が見られる。先日、私自身も小学生も参加した総会を参観し、目から鱗が落ちるような印象を受けた。小学生にとっては、中学生の姿を生で見ることで、本当に力が付くと感じた。

(会長)

本日、委員として参加していただいている3名の先生方が所属されるブロックの取組状況でのアピールのポイントを聞いて、今までの小中連携・小小連携という課題の次のステップである「学力向上」を目指した新しい展開を模索されていることが分かった。そこで、今年度は、そういった各校が模索されている展開の状況を中心に視察させていただきたいと考える。

(委員)

横島中ブロックは、8月20日の合同研修会（会場は北横島小）を行う予定であり、まず、前半は全体で、「道徳の評価のあり方」について研修する。その後、学力充実部より、横島中ブロックの学力状況について報告・説明を行い、それを受けての課題提起を行う予定であるので、その状況を見てもらうのも価値があると思う。

(副会長)

これまでの報告等を聞くと、今、宇治市にとって学力充実が大事であることは理解した。そこで、要綱の9ページに示されている到達目標として、コーディネーターを中心に、学力充実を図るべく取り組むことが示されているが、ここで言う「学力充実」とは、学力診断テストの点数を上げることであると理解してよいのか？それとも、そんな単純な話ではないのか？

(委員)

一面的には、点数を上げることが目標にすることがあるかもしれない。しかし、学力診断テストの点数は、学力の一部であり、それだけを目指している訳ではない。

例えば、宇治市では「宇治学」を進めており、探究的な学習を目標として取り組んでいる。具体的には、子どもたちが、自分で課題を見つけ、自分たちで解決をしていくことを目指して学習することに取り組んでいる。当然、宇治学を進める上での、その基礎となる四則演算や、読み・書き・そろばんといった力も大事であるが、それに加えて、子どもたちが学ぶ楽しさをみつけたり、集団作りを行うといった、遠巻きの部分の力を付けることも大事にして取り組んでいる。そういった学習を小中連携・小小連携により、それぞれの地域ならではの子どもたちをどう育てるかを重視して、子どもたちの力を付けるべく取り組んでいる。

したがって、学力診断テストの点数を上げることが目標ではないことを理解していただきたい。

(副会長)

宇治市が捉えている「学力充実」の本来の意味については理解した。しかし、私は、以前より小学校の先生と中学校の先生の学力観は違うと考えている。なぜならば、中学校の先生については、卒業後の高校等への入学試験のために、そのための学力テストをパスする学力を付けなければならないと考えている。ところが、小学校の先生については、中学校の先生の捉える学力を本来の学力

ではないと否定しており、私が知っている小中学校においても、こういった学力観・学力についての見方について論争が元々あり、ずっと続いてきたのが現実である。

そこで、小中一貫教育を進めてきている宇治市においては、その部分の擦り合わせは終わっていると考えてよいのだろうか？

(委員)

本校では、小中学校の教職員の学力観の統一を図ることを、最初の取組として行っている。今年度も、宇治黄檗学園において、87名の小中の全教職員が同じ学力観を持ってスタートできるよう、年度の最初に確認をした。

全国学力学習状況調査を見ると、学力についての指標については、以下の5点が示されている。

- ①狭い意味での、学力テストでの国語や算数・数学等の点数
- ②児童生徒のやる気（意欲）
- ③道徳に代表される規範意識
- ④生活態度や「早寝・早起き・朝ごはん」などの生活習慣
- ⑤体力

以上5つの学力を総合して、全てを向上させなければ、国語や算数・数学等も向上しないということを指導してきている。前任校の平盛小学校では、意識改革に何年もかかったが、現任の宇治黄檗学園は、小学生がそのまま同じ学校の中学生になるので、他のブロックと比べて、中学校でも小学校の文化が根付いており、小中一貫教育の考え方が入りやすいと感じ、現段階では頼もしく感じている。

これまで、学力観を以上5つの総合的な学力という考え方で、浸透させてきた。しかし、表に出ると、数字だけが一人歩きするために、学力診断テスト等での点数のみが注目され、同じテスト等で明らかになった「やる気」や「学校が好きか」などの傾向や状況となる数字は、表に出ないことが多い。せいぜい、無回答率が出る程度である。

そこで、こういった表に出にくい結果を、研修会を通じて教職員や地域に返していきたいと考える。

(委員)

中学校の場合、出口が高校受験なので、最終的にはテストでどれだけ点数がとれるかが大事になる。また、小学校と中学校の学力に関する意識が完全にイコールかというところまでは到達していない。宇治市で平成24年度に小中一貫教育を全面実施した時、最初にそれぞれのブロックで研修会を行い、その中で、中学校のテスト問題の交流や公立高校の入試問題をみんなで解答するなどをした。しかし、当時は、小学校1年生の担任の先生の意識は、9年後の中学校の出口を意識できるレベルではなかった。そして、その意識は、今でもさほど変わらないと感じる。つまり、小学校1年生の担任の先生に、中学校3年生の高校受験を意識してくださいということは難しいと感じる。その際、どこまで小学校の文化と中学校の文化を融合させるかについては、頭では理解できても、そこをきれいに整理することは、現状ではまだ難しいと感じる。

(委員)

保護者のイメージする「学力」とは、やはり、我が子が「しっかりテストで点数を取る」と思う。ただし、これは中学生の子を持つ保護者のイメージであり、私には現在幼稚園児もいるので、その子が小学校に入学した時には、「しっかり字を書けるようになってほしい。」や「やればできる」という意欲と自信を持ってほしい。」という希望を持っているので、学力のイメージも中学生の子とは異なる。

(会長)

本協議会の本年度の取組についての協議が、かなり広がってしまったので、本来のところに戻したいと考えます。

先ほど事務局より説明していただいたように、本協議会は、本日を含めて2回の協議会を開催することと、各中学校ブロックの取組の視察について重点的に取り組んでいくという方向で意義はないだろうか？

(副会長)

本日説明のあった「アンケート」については、毎年行っているのか？

(会長) → 毎年行っている。

(副会長)

本日の資料の巻末にある「小中一貫教育についてのアンケート」を今年度も、本協議会の活動の一つとして行うという表記がないが、アンケートの実施について説明していただきたい。

(事務局)

アンケートについては、今年で7年目の実施となるが、毎年行っている旨の回答あり。なお、昨年度は、内容を一部変更した。要綱には、敢えて今年度の活動としては掲載していないが、例年どおり実施し、現在集計を行っている。

(副会長)

今説明があったことから考えると、何年もアンケートを実施しているのならば、経年変化の状況を把握していて提示していると理解してよいのか？

(事務局)

毎年、過去5年間の経年変化を示している。ただし、一部アンケート内容を変更しているものについては、省いている。

(会長)

アンケートの集計結果や経年変化を含めた分析結果については、第2回の推進協議会で報告されることになっていると補足説明。

(事務局)

委員の視察に関する資料の説明

■別紙1 平成30年度 ブロック行事および学校行事の一覧

・平成30年度 2学期に予定されているブロック行事の一覧

・平成30年度 2学期に予定されている学校行事の一覧

■別紙2 視察希望報告用紙

(会長)

今年度、本協議会は、昨年度に引き続き小中一貫教育の取組全般についての進行管理を中心に活動していく。具体的には、2回の推進協議会と2学期の各中学校ブロックでの取組の視察を行うことに加えて、各中学校ブロックでの気軽に参加できる行事にも可能な範囲で参加し、意見や感想を述べていただきたい。そして、そこでの状況を第2回の協議会に持ち寄っていただきたい。さらに、(事務局主導にはなるが)小中一貫教育についてのアンケートを実施し、その結果を第2回の協議会で報告し、協議することになる。

今年度の活動は、こういった内容でよいだろうか？

(委員) → 異議なし。

(4) 報告4 平成30年度小中一貫教育の取組について

資料(9頁～)により事務局より説明

報告4について質問・意見等と応答

(会長)

各ブロックの取組の中の「合同研修会」については、小中一貫教育が導入される以前は行われなかったのか？行われなかったとすれば、行われる前と後では、どのような変化が見られるのか？

また、行われるようになってからは、どのように到達目標を設定して行っているのか知りたい。

(委員)

平成23年度までは、小学校と中学校の教員が、同じ場所で合同で研修するということは、ほとんどなかった。小学校と中学校の教員が顔を合わせるというのは、「小中連絡会」と呼ばれる引継についての確認をする会議が年度末に1回行われる程度であった。したがって、小学校児童がそのま

ま中学校に進学する関係にある小中学校（今で言う同じブロック小中学校）に、どんな先生が勤めているのかをほとんど知らなかった。

だから、当時（小中一貫教育導入前）の中学校教員は、「小学校の教員は、（児童が中学校に入学するまでに）基礎的なことをもっと十分に指導しておいてほしい。」という思いを持っていた。一方、小学校の教員は、「私たちは、中学校に進学する児童に、小学校でしっかり指導したのだから、中学校に入学後は、もっと力を伸ばしてほしい。」という思いを持っていた。このように、お互いがお互いを知らないために、小中連絡会等で顔をつきあわせると、こういった思いをお互いにぶつけ合っていた。ところが、小中一貫教育が導入され、合同研修会を行うようになると、同じ場所で顔をつきあわせて話し合ったり、研修するようになることで、お互いの学校の教員の存在を知るとともに、それぞれの教員の「良さ」についても気付くようになったことが大きなプラスであったのを覚えている。

そこで、宇治市で小中一貫教育がスタートした当時は、「中学校ブロック推進体制の充実（充実よりも確立が妥当）」が第一の目標であったと感じている。そんな状況が、今年度の到達目標では、4番目に示されていることを考えると、それなりに体制が整っているのではないかと評価している。小中一貫教育が始まるまでは、お互いがお互いの文化・風土を理解しようとしなかったが、今は理解するようになり、その前提に立って小中学校は何ができるかを考えるようになったというのが現状である。ただし、これで十分というわけではなく、授業研究をしても、未だに相容れない部分が現実として残っている。その中で、小中学校の教員が意見をぶつけ合いながら、歩み寄りや影響し合うことで、9年間を見通して何ができるかの模索を行うことが、現段階のあるべき姿ではないか。（会長）

今話を聞く限り、（小中一貫教育が）確実に前進していると理解した上で、まだまだ課題はあると感じたが、保護者は、そのあたりの変化をどのように感じているのだろうか？

（委員）

正直、本日この協議会に参加して、今のような変化を初めて知った。先生方が、とても頑張っておられると感じたが、（自分の）子どもを見ていると、そのあたりは伝わってこないの、よく分からないというのが現実である。ただ、昔と比べると、小学生が中学校に進学したときの「ショック（中1ギャップ）」が少ないのではないかなと思う。中学校への入学当初から、ほとんどの生徒がのびのびと中学校生活を送っていると感じている。

（委員）

以前は、小中一貫教育って何をしているのかよく分からなかったが、委員をさせてもらうなどして、少しずつわかってきた。我が子は、全校児童数が20名に満たない笠取小学校出身であったが、覚えているのが、木幡中学校の先生が、笠取小学校まで来て、授業をしてくれたり、「三校交流」という行事により、笠取小と笠取第二小の小さな学校の児童と御蔵山小及び木幡小の大きな学校の児童（同じ木幡中学校へ進学する児童）が交流することで、中学校へ行った時に、不安にならないように取り組んでもらっている。（今から思うと）これも、小中一貫教育の特徴的な取組であると理解している。

宇治市が進めている小中一貫教育は、全てのブロックが（無理して）同じような取組を同じ調子でするのではなく、地域の特色を生かして無理のない取組を進めていくことが大事であると考えている。（会長）

保護者として感じておられることをお聞きし、小中一貫教育について、取組が進んでいることは感じていても、言葉に表すことが難しいことを感じた。そこで、到達目標の(3)家庭・地域との連携にあるように、本協議会や市教委をはじめとした各小中学校が、例えば、アンケートの結果等を発信するように、新たな情報発信を進めることの大切さを痛感した。

（5）報告5 小中一貫教育のアンケートについて

資料（16頁～）により事務局より説明

報告5について質問・意見等と応答

(副会長)

アンケートの結果が公表されているというのは、(宇治市の) ホームページを見れば、歴年の状況を見ることができるという意味か？

(事務局) → 見ることができる。

(副会長)

アンケート結果は、単純集計として処理されているのか？すなわち、○年生や保護者に質問した結果がどうであったかが、単純に集計され、一覧となっていると理解してよいのか？

(事務局)

基本的にはそうであるが、集計する際に、施設一体型の宇治黄檗学園と施設分離型のその他のブロックを比較したり、さらに、分散進学を含むブロックと分散進学を含まないブロックを比較するなどの比較集計も行っている。

(副会長)

アンケートの対象がいくつかの層(小5及び小6、中1、中2及び中3、小学校保護者、中学校保護者)であるが、それぞれの相関はとっていないのか？また、アンケート結果と学力との相関はとっていないのか？毎年アンケートをやっているのならば、こういった相関をとらないのは、もったいないと思う。例えば、子どもたちの集計結果と保護者の集計結果の相関をとれば、何か見えてくるものもあるのではないのか？余裕があれば、ご検討をいただきたい。

(事務局)

先ほど、分散進学を含むブロック(学校)と含まないブロック(学校)を比較するなどの集計比較について話をしたが、この比較はあくまでも子どもたちが、個人として分散進学による不安があるかどうかを調査するために今年度より質問の内容を変えているので、誤解のないように願いたい。今年度のアンケートから、中学生徒に「出身小学校名」を記入するように求めているのは、学校としての括りではなく、個人として気持ちを調査していることをご理解いただきたい。つまり、「分散進学を含む学校出身だからこのような結果である。」という捉え方ではなく、「分散進学を含む学校出身の生徒が、このような傾向を示した。」という相関を調査するために、今年度、アンケートの内容を一部改訂した。

(会長)

今、アンケートの内容についてのご意見もいただいているが、今年度のアンケートについては、すでに実施済みであり、現在、その集計が進められている段階なので、今回いただいたご意見等は、来年度のアンケートの内容や方法に反映するという確認でよいだろうか？

(事務局)

小中一貫教育推進の趣旨が、小学校から中学校へのなめらかな接続であることから子どもたちが、少しでも悩みを減らして中学校生活を送れるよう、子どもたちから生の声を聞き、改善を図るための手段の一つが、今年度のアンケート内容の一部変更である。したがって、子どもたちが、小中9年間を通して、生き生きと生活できるよう、アンケートも含めて改善すべき部分は、毎年改善していきたいと考えているので、今後も、皆様から忌憚のない意見をいただき、反映していきたい。

(副会長)

アンケートの中に、「学校用」があるが、これは校長先生用であって、実際に実践されている教職員一人一人へのアンケートはないのか？

(事務局)

校長が回答するが、組織の代表として、教職員一人一人の意見が概ね反映されていると理解している。

(副会長)

アンケートが、今年で7年目であると聞いたが、10年目くらいに教職員一人一人を対象とした「教職員アンケート」を行ってはどうかと考える。

(会長)

小中一貫教育が全面実施から7年目を迎えた。本日の協議会において、事務局からこれまでの取組の状況や今年度の具体的な取組の状況について説明を受けた。

そこで、この後は、委員それぞれの立場で、「宇治市小中一貫教育への期待や要望」についての意見をいただきたい。

(委員)

この推進協議会は、昨年度から委員をさせていただいた。各ブロックの取組を視察させていただき学んだ中で、南宇治中ブロックの取組が印象に残っている。自分自身が、昨年度、広野中ブロックに赴任し、コーディネーターとして考えていたことは、「広野中ブロックの行事(取組)を継続して実施しなければならない。」という意識で動いていたのを覚えている。ところが、南宇治中ブロックは、ブロックの抱えている課題を把握し、その課題を解決するために何をすればよいかを考えて取り組んでおられるという印象を受け、本来あるべき姿を教えてもらったのを覚えている。そこで、今年度の広野中ブロックの取組を進めるに当たっては、南宇治中ブロックの取り組む姿を参考に取り組んでいきたいと考えている。

(委員)

私も、今の委員の話を聞いて、今になって、「そうだったのか」と納得したことがあるので、伝えたい。その時には、気付かなかったが、委員の「課題に応じた取組」という説明により、今理解することができた。

中国の子が、いきなり日本に来て、日本語がわからないので、「さあ、学校に行きなさい。」と言われても、まず、日本語を覚えなければならない。そこで、学校には、専門の先生がおられ、その先生から、日本語とともに、日本での(学校)生活のしかたを学んでいると聞いた。ただし、教室(学校)には、中国からの帰国子女の子もいれば、そうでない子もいるので、(全ての子を)中学校へ導くというのは大変だと感じた。

私が見た行事(取組)の様子は、(良く言えば)活気があるというか、ドタバタと取り組まれていた印象があった。その時は、(いろんな子がいるから)それなりにされているのかな?と感じたが、(今から思えば)こういった状況(背景)があったから、その時はドタバタとしていたのかということが、たった今理解できた。

(委員)

続けることに意義があるので、どんな形であれ、宇治市は、「小中一貫教育」という手法を使って取組を進めているので、行政と学校現場、地域の方々、保護者が一緒になって、この先も、この手法を利用して、子どもたちに良い環境を作っていけるようにしていくのが、我々の役目であると考えて。そういった意味で、本推進協議会が起爆剤になればと期待している。

(委員)

本日参加された委員の方から、(南宇治中の取組を)ほめてもらい、昨年度まで、南宇治中ブロックの校長をしていたので、大変嬉しく感じている。やはり、我々教員は、地域に根ざさなければいけないと再認識した。先ほど、育友会(保護者)の立場の委員さんから、子どもには、これが小中一貫教育であるという成果が見えてこないという話をうかがったが、私は見えてこなくても良いと考えている。

ただし、我々の各現場の小中学校は、あらゆることに、もっと努力をしなければならないと感じている。例えば、学校ホームページ一つにしても、毎回更新すると、閲覧者は増えるが、更新しなければ、閲覧者はなかなか増えてこない。学校ホームページの活用は、宇治市においては遅れていると感じている。今後の課題として、(学校ホームページの積極的活用について、)発信していく必要がある。また、各学校に設置してある「掲示板」も十分活用されているかという点、そうではないと思うし、単に、学校日より等を掲示するのではなく、(地域の方に見ていただくために)加工した上で掲示するなどの工夫が必要であり、そうでなければ、広がらないと思う。

最後に、校長会としても、この小中一貫教育を活動の第一の柱としている。そういう意味で、小中全ての校長が、月に1回、合同で会議を行っている。校長会としても、(小中一貫教育の推進のために)できることは多々あると思うので、今後も検討していきたい。

(委員)

本日の会議の中で、宇治市の小中一貫教育が、「学力充実」を重点として取り組まれているという報告を受けたが、我々が、学校を訪れた時、子どもたちに対して、第一印象で「賢いなあ」と感

じることがある。それは、子どもたちが、「おはようございます」や「こんにちは」としっかりあいさつをしてくれた時である。しっかりあいさつができる子が、しっかり勉強を頑張っているかどうかはわからないが、先生方には、そういったところも重視して指導していただきたい。

(委員)

小中一貫教育のことをほとんど理解せずに本協議会に参加し、皆さんが頑張っておられるんだなあという感じた。子どもたちが、より良い環境で学習できることが一番よいと思うので、「これからもよろしくお願いします。」という思いだけである。

(副会長)

最初の自己紹介で、私の専門が社会教育と人権教育であると話したが、今一番の関心事は、「子ども貧困」、「ネグレクト」、「虐待」である。

小中一貫になれば、小学校で、担任の先生たちが家庭訪問をしたりして把握した情報をそのまま中学校にあげていくことが比較的可能になっていくと思う。そういう意味で、「安心・安全で楽しい学校」で、子どもたちが幸せに暮らせる地域社会という意味では、小中一貫教育で、子どもたちの背景・家庭状況をみんなで共有していくということをもう少し前面に出してもよいのではないかと思う。

ただし、色々な事情もあるので、現状では、「学力充実」を前面に出して小中一貫教育を進めるのが一番良いのかなと本日の会議を通して感じた。

(会長)

「学力充実・向上」という切り口であるが、そこから広がっていく連携があると私も感じた。

先日も大きな地震が起こったり、大雨が降ったりしたが、なかなか日常生活で何が起こるか分からない中で、「小中一貫教育」が、学校・保護者・地域のつながりが、安心・安全な子どもたちの環境づくりに役立つと嬉しいと感じている。

(会長)

以上の協議をもって本会を終了します。

(事務局)

今後の推進協議会の日程について説明

3 閉会

伊賀部長より閉会の挨拶